

# 偉大な親分、小柴先生

(株)ブリヂストン  
須藤 千秋

昨年の衝撃的なノーベル賞ダブル受賞の報から、はや1年が経とうとしている。この朗報が、長い不況の中で喘ぐ国民にとって、この上ない励ましになったことは記憶に新しい。

個人的には恩師の受賞という稀有の体験であったために、喜びもまたひとしおであった。ここに先生の素晴らしい人となりや少々紹介させていただく。

先生との出会いは、大学の専門課程に進学して選択した「高エネルギー物理学」という講義である。高エネルギー物理学というあまりなじみがないと思うが、素粒子（物質の基本構成要素）の挙動や消長を実験的に研究する学問で、素粒子理論や宇宙論と切っても切れない関係にある。

主たるツールは宇宙から降り注ぐ宇宙線の観測と加速器実験である。私がこの世界に接したこの時期は、米国とヨーロッパを中心に大型の加速器による実験が盛んに成果を出しはじめる時期であった。

先生の講義はユーモアとウィットに富んだもので、学生たちの間でも人気講義のひとつであった。本郷キャンパスに御殿下グラウ

ンドという、ちょうどサッカーのピッチ一面分のグラウンドがあるが、その下に加速器を作るとどれくらいのエネルギーの電子・陽電子衝突実験ができるか、それが山手線の大きさだったらどうか、というような演習問題は、題材が身近で面白かったのを覚えている。

先生は大概太いうねのコーデュロイのズボンに大きなチェックのジャケットというスタイルで、腰のベルトには老眼鏡のケースとゴールデンバットの入った箱が装着されていた。一コマ90分の授業の半ばで、「ちょっと一服、君たちも良かったらどうぞ」といって、ゴールデンバット一本をうまそうに燻らせるのもユニークであった。

3年生の夏休みになると、希望する学生に好きなテーマで実験をするチャンスが与えられた。これは正式な単位には全く関係なく、純粋に好奇心を満たすだけのものである。飾らない温かい人柄に惹かれていた有志達（私を含め6名だったと思う）は、小柴先生の下で宇宙線中の $\mu$ 粒子の寿命測定をすることにした。

理学部1号館地下の一室を与えられ、早速検出装置の設計・製作を始めた。宇宙から降り注ぐ

高エネルギーの $\mu$ 粒子を検出し、様々な種類の吸収材を経た後の検出の差から平均寿命を統計的に割り出すのが課題であった。

吸収材として複数の比重の物質を使う必要があったが、予算も時間もないので困っていると、小柴先生が新日鐵の重役に電話され、翌日には重量1トンの鋼鉄コイル2巻きを積んだトレーラーが実験室に横付け、度肝を抜かれた。

また、財布から数枚の1万円札をだして、「これを根津の第一勧銀に行って1円玉に変えてもらって来い」と言われる。1円玉は純粋なアルミニウムの塊である。

私はこのとき初めて麻袋に入った1円玉10kg分を目の当たりにし、根津からの登り坂を手押し台車に載せて歩いた興奮を今も思い出す。

実験の合間には先生に率いられて、乗鞍岳の宇宙線観測所の見学もさせていただいた。自分達のままごとの様な実験と、本当の研究の第一線との対比も大いに勉強になった。

この夏の経験で、高エネルギー物理の広大無辺な世界を垣間見たことと、小柴先生の「行動力」「アイデアの豊富さ」「人脈の広さとその大切さ」、「学生に対する深い愛情」に接するこ

とができた。何事にも代え難い収穫であった。

4年生の研究室選択で迷わず『小柴研』の門を叩いた私は、さらに踏み込んだ高エネルギー物理学実験に関わっていった。当時はJADEというドイツ、英国との共同研究の準備期間であった。私もドリフトチェンバーという新しい粒子検出器の一部分の開発を担当した。

研究の内部に入ってみると、外からでは分からない小柴先生の学問に対する厳しい姿勢を知ることとなった。すなわち、ここというポイントに対しては一切の妥協、不明瞭さを許さず、優秀な大学院生も厳しく叱り飛ばされる。これはなかなか難しいことで、体力、知力、そして人間的魅力が揃ってないと実現できない。

特に高エネルギー物理学のような大規模実験では、国際的にも大規模なチームワークが問われる。それは、明確な目標設定とぐらつかない信念、そして人間的魅力が備わったリーダーシップがないと成功しない世界である。

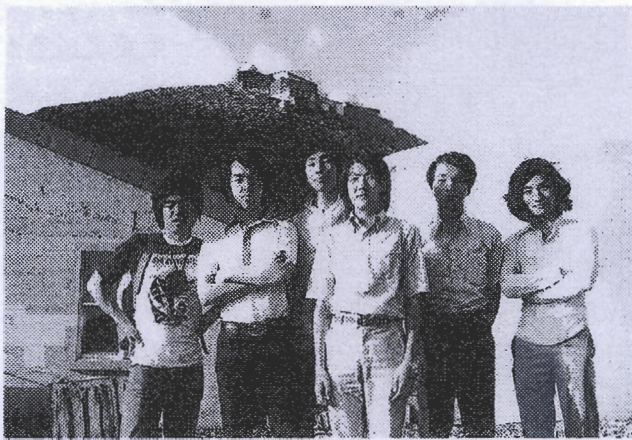
先生のノーベル物理学賞受賞は、カミオカンデによる超新星爆発由来のニュートリノ検出が大きな成果とされているために、偶然や幸運の所産と思われる向きもあるかもしれない。先生が開拓したニュートリノ天体物理学は、熟慮の上に花開いたひらめきと、それを実行する行動力によって、必然の幸運として実を結んだものであり、これ

からも人類が宇宙の秘密を探る新しい目として多くの成果を生み出すだろう。

わが国にこのようなオリジナリティーあふれる卓抜したリーダーシップが育ったことを、素直に誇っていいと思う。

優しさと厳しさ、知性と情熱がバランスした先生を、私たち門下生は“親分”と呼んでいる。いにしえより子分が親分を慕うのは、そこで価値あるものが得られるからだろう。

実際私たちは多くの価値を生



乗鞍宇宙線観測所にて実験仲間と(1975年)左端が筆者

み出すことができた。高エネルギー物理学が希望に燃えて発展を始めたあの時期に、小柴先生という稀有のリーダーと過ごせたのは、私にとってかけがえのない財産である。

いま、私は高エネルギー物理学やニュートリノ天体物理学とは関係のない世界に身をおいているが、リーダーシップを発揮しなければならぬ場面は事欠かない(編集部注=12頁参照)。先生の足元にも及ばないながら、小柴門下生の名に恥じないよう、若い人達に親分と慕われるような価値ある仕事をしたいと、いまも切磋琢磨の毎日である。了

すべてがひかえめ——国民的榮譽のN賞受賞記者会見に作業服姿で臨み、男を上げた?田中耕一さん。他方、地球をも突き抜けるニュートリノの検出でノーベル物理学賞を受賞した小柴先生もまた、じつに魅力に富む研究者だった。

研究成果と人格は関係ない?さいわい“小柴研”出の研究者がエラストマー、それも免震世界にいると知った。ゴム支承屈指のエンジニアのひとり、プリヂストンの須藤さんそのひとである。

ニュートリノが水中を通過する際、光を発する——その光を検出する電球のお化けみたいな受光器——これまで世界最大直径12号だったそれを、メーカーであるハマフォトニクス社長を呼びつけ、「ひとの胴体並みのものを作れ。」「できっこない」「いやできる、ぜったいやれ。」

押し問答のあげく、お化けみたいな球1万個を作らせる予算を、しかるべき筋

から調達させる豪腕——。

ちなみに前東京大学学長・運実重彦はそうした野趣溢れる情熱的知性のありようを、あくまで比喩と断った上で、“やくざ”な先生とユーモアを込め最大限賞賛している。

世界的ブレイク・スルーを支える、火のような精神。

そんな受け売りを「ホントですか?」と須藤さんにぶつけた。

『とんでもない、先生はやくざどころか親分ですよ』。本稿はそういう雑談のなかから依頼、飛び切りのリーダー像の断片を素描いただいたものです。

(編集部)